

背中汗ばんだ胸板が張りついている。

彼の心臓の音が私の背骨に当たる。

「あ……もう、やだあ……っ♡」

「遠慮しないで♡ 僕たちの再会記念なんだから、もっと気持ちよくなって♡」

「いらな……♡ もういらない……っ♡♡♡」

ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐぽっ♡ ぐぽお♡

逃げ場はどこにもなかった。

閉じようとした脚は膝の裏から掬い上げられてしまい、むしろ大きく開かされそのまま固定された。

おまんこに挿入された三本の指は、バラバラとそれぞれ違う動きをする。

抜き差しされる度にどちらのものかわからない白濁がだらだらとこぼれ落ちて、シーツの染みをまたひとつ濃くした。

耳の奥でキーンと耳鳴りがして、息が詰まる。

「いぐ……またいぐう~~~~♡♡♡♡♡」

「イクの止まらないね♡ かわいい♡ クリも一緒にくちゅくちゅしようね♡」

「あ……♡」

くちゅくちゅ♡ ぐぽっ♡ くちゅ♡

溢れた蜜をローション代わりにクリに塗り付けられ、クリもナカも暴力的な快楽を与えられる。

（雑魚クリ、おちんぽみたいにしこしこされちゃってる……♡ 頭、バカになるッ♡ 変になっちゃうう♡♡♡）

くちゅ♡ しこしこッ♡ ぐちゅぐちゅうう♡

「イグの……♡ とまらなっ……♡ あ、ジ~~~~♡♡♡♡♡」

首筋にかかる吐息は信じられないくらい熱くて、少し湿っていて——そのくせ、声だけが恐ろしく冷静だった。

その落差に、うなじがぞくりと粟立つ。

「ばか……♡ ゆう……まの、ばかあ……っ♡♡♡♡♡」

「いのり、お口が悪いよ♡ もっとかわいいこと言って」

耳元で低く笑う声が、鼓膜を撫でる。いつもと同じ声のはずなのに、全然違う。私の知っている幼馴染は、こんな声で、こんな笑い方をしなかった。

ぢゅうううっ♡

首筋にチリッとした痛み。それさえも気持ちがよくて、喉が勝手に鳴った。そのまま肩の辺りを思いっきり噛まれた。明日にはきつと痕になっている。

（本物の悠真、妄想の百倍やばい……っ♡♡♡♡♡）

数えきれなくらい、悠真に抱かれることを想像した。

けれど、そのどれもが本物よりもぬるかった。

「……いのり。今、なに考えてた？」

「なんにも♡ 考えて、ないッ……♡♡♡♡♡」

「嘘つき」

耳たぶを甘く噛まれて、思考が焼き切れる。なんにも考えられないまま、降

りてくる間もなく、また絶頂する。潮がたらたらと流れる。

知らなかった。好きな人に触れられるのが、身体を重ねるのがこんなにも満たされてキモチがイイだなんて。

驚くほどあっさりと、この男に身体を作り変えられてしまった。

「いのり、もう一回。いいよね？」

——どうして、こんなことになったんだろう。

ほんの数時間前まで、私の毎日はこんな風じゃなかったのに。



めい倶楽部

尾尻めいこ

念願のひとり暮らし。

玄関のドアを開けるたび、世界が自分の色に染まる。

サボンの香りがするルームフレグランスが、優しく私を迎えてくれる。カーテンも、棚も、小物類も、全部大好きな淡いピンクで埋めた。誰の許可もいらない。誰の視線もない。私だけの城。

ここまで来るのに、本当に長かった。

高齢出産で私を授かった両親は、私を大切にしすぎた。心配で、過保護で、過干渉で。『あなたの意見を尊重する』と言いながら、尊重された記憶はほとんどない。

隣の家の子が同じ年だとわかった日から、両親は私たちをいつも一緒に行動させた。

それが悠真。

私たちは、幼馴染であり、友達であり、そして家族みたいにして育った。顔も頭も運動神経も。憎らしいことに、人当たりまでいい。何もかもが完

壁な幼馴染。

平凡という言葉を負って歩いている私とは大違い。

『いのりは僕が面倒を見るから』

悠真がそう言うたび、私の周りから潮が引くように人がいなくなった。異性も同性も、ほとんど私に近づかなくなる。

どうして私のことを私以外が全部決めるんだろう。どうして私の隣には、いつも悠真しかいないんだろう。

そんなことを考えるようになったのは、就職してからだ。関わる人が変わって、自分が普通の環境で育ってきたわけではないことをなんとなく悟った。このままではもっとダメになってしまう。漠然とそう思って、何か月も入念な計画を立てて、私は実家を飛び出した。

……なんて色々言いながら、本当は逃げただけだ。両親からも、悠真からも。誰にも行き先は告げなかった。連絡先も変えたくて、スマートフォンも新しくした。とにかく私のことを知っている人がいない場所に行きたかった。

そうしてやっと手に入れた、私だけの部屋。私だけの時間。縁もゆかりもない、遠く離れた場所での新生活。

それが嬉しくもあり、同じくらい辛くもあり。

「今日は……どれにしよっかな」

ベッドの下の収納の一角にあるのは、私の大事なコレクション。

えっちな玩具と、私のオナニーを盛り上げてくれるお供のMDたち。今日は玩具はお休み。手癖で選んだ一枚を取り出した。

今どきMDを使うだなんて古くさいかもしれないけれど、スマートフォンではなく、わざわざディスクに落として並べるのも私の趣味だ。

それに——このプレイヤーで聞くことに、意味がある。

ピンク色の手のひらに収まる小さな四角。あちこちヒビが入っていて、絆創膏のようにマスキングテープを貼った。

うさぎのロゴが好きで、そこばかり指で撫でてしまう。

サポートなんてとつくに終了しているし、電池だつてすぐになくなる。ディスプレイを入れるたび、じじっ、と情けない音を立てるので、いつ止まるかとヒヤヒヤしている。私の宝物だ。

これは小学生の頃、誕生日に悠真がくれたものだ。

母に「悠真くん、お年玉全部使って買ってくれたんですって。大事に使おうね」と言われたのを覚えている。

あの日から十数年。私はこれを使い続けている。

新しいものを買えばいい。スマートフォンに落とせば済む話だ。何度もそう思って、何度もやめた。だって、これじゃないと意味がない。

(……こんなことに使ってるって知ったら、悠真どんな顔するかな)

考えて慌てて頭を振る。知られるわけがない。もう、二度と会わないのだから。

オナニーは実家では自由にできなかった。たまに両親がいないときにするか、母がいつ部屋に入ってくるかわからない緊張の中で、息を殺してこっそりするしかなかった。まあ、それもそれでスリルがあつてドキドキしたけれど。

でも、ここには誰もいない。

（妄想の中のなら、悠真とえっちなことしても許されるよね？）

そう自分を納得させる日々。

現実の悠真とは絶対ならないシチュエーション。起こらないえっちな出来事。それを私は何度も何度も繰り返し体験している。

おかげで処女なのに、すっかりドスケベになつてしまった。

ただ、ナカは未使用だ。一度だけ指を挿入してみたことがあつた。気持ちよさどころか異物感しかなく、それ以来一切触れていない。デイルドもいくつか持っているけれど、結局どれも新品のままだ。

セックスはしたことがなくせにその手の知識は豊富。処女なのに、クリトリス大好きのおナニー狂い。

それが私の正体。

服を全部脱いで、毛足の長いラグに寝転がる。頬に柔らかい繊維が触れて心が和らいだ。このラグは、ふわふわの素材に一目惚れして真っ先にお迎えした。下半身には厚手のタオルを敷いて準備万端。

イヤホンを両耳に押し込んで深呼吸をひとつ。

再生ボタンを押すまでの数秒が、いつも一番落ち着かない。

(……ごめんね、悠真)

いつからか、悠真に謝ってから聞くのが癖になっている。

謝ったところで許されるとも思わないし、この行為をやめられないのだけ
れど。

かちり。じじっ。

『——また俺にいじめられに來たのか？』

低くて、少し掠れた声。

声優、というだけの全然知らない男の人の声。けれど少しだけ悠真に似ているその声に、つつい惹かれてしまった。

目を閉じる。それだけで、声は勝手に私の中で置き換わる。

『いのり。また來たの？』

優しい声。私の知っている、王子様みたいな悠真の声。

流れる音声は、一人称も口調も本物とは全然違うのに。何度も何度も聞いているうちに、いつからか両耳から聞こえるのは悠真の声になっていた。

（來たよ。だって悠真のことが大好きで、私はここでしかその気持ちを伝えられないから）

『お前、いつからそんなにえっちな子になっちゃったんだよ？』

『いのりはいつからそんなにえっちな子だったの？』

真っ黒なはずの目の前に浮かぶのは、しっかりと服を着た悠真。私の上に跨って、舐めるように全身を見つめてくる。私は全裸なのに、彼はどこも乱れていない。

（今日も悠真に気持ちよくされちゃう……♡）

片手は既にツンとしてゐる乳首を避けて、その周りだけを優しく撫でる。もう片方の手は、迷わず秘所へ。

悠真はじつと私を見ているだけで、何もしない。それがたまらなく私を興奮させる。

気持ちだけ高めて、いきなりガシガシ触ったりしない。

まずは人差し指と中指の腹で、ゆっくり。中心より少しだけ左に、私の一番気持ちいい場所がある。そこへと自然に指が向かう。

おまんこはもうしっとり濡れていた。

『ほら、気持ちよくなりたいなら、どうすればいいかわかるよな。……そう、まずは脚をガニ股にして、俺に雑魚クリと雑魚マンしっかり見えるようにし

ましようね♡♡』

『いのり、気持ちよくなりたいなら、どうすればいい？ 上手にガニ股に広げられたね。いのりのよわよわなクリトリスもおまんこも、しっかり見えてるよ♡』

言われた通りにガニ股に開く。誰も見ていない部屋で、それでも顔が熱くなる。次に何が起こるか知っている身体は、脚を開いただけで勝手に内側から蜜を出す。

目の前の悠真が私の右耳を丁寧に舐める。右手は左耳をこしょこしょとくすぐる。

右耳から、じゅる♡じゅる♡と嫌らしい水音がして、耳から入ってきたものが、そのまま身体中を駆け巡る。

匂いも温度もないはず。けれど、よく嗅いでいた悠真の爽やかな香りとねっとりとした熱い舌の存在を感じて、お腹の奥がズクンと重たくなる。

『おいおい、まだ耳舐めたただけだぞ。えっちな汁でぐちよぐちよじゃねえか。』

——いいぜ、おっぱい触れよ。ただし、乳首はまだダーメ♡ 周りをさわさわって優しくな』

『いのり、まだ耳舐めただけだよ。えっちなお汁でぐちよぐちよだ。待ちきれないんだね。——いいよ、おっぱい触って。でも乳首はまだ触ったらダメだよ。周りだけ♡』

今日のお供のシチュエーションボイスは、幼馴染の男の子に意地悪く追いつめられるもの。

クリトリスも乳首もおまんこも。散々寸止めされたあと、恥ずかしい言葉を言わされて、思いつきりイカされる——というものだ。

（ちよつと意地悪されるのが、好きなんだよなあ……♡）

「ふっ……、んあ♡ はあっ……♡」

乳首を避けるように胸を愛撫する。もどかしい刺激におまんこがきゅんっとなる。耳から絶え間なく聞こえる、じゅる♡じゅるるっ♡という水音は右から左へと移っていく。

『じゅる♡　ぐちゅ♡　乳首もピンピンじゃねーか♡　ふー♡　ははっ。もしかして、息吹きかけられただけで甘イキしたのか、雑魚だな♡』

『じゅる♡　ぐちゅ♡　いのりの乳首ピンピンだ♡　ふーっ♡　あれ、もしかして甘イキした？』

耳から吐息が聞こえる。

ぞわぞわする乳首は、触ってほしくてぷっくりと赤く熟れていた。

『早く触りたくてうずうずしてるじゃん。ダメに決まってるんだろ♡　ほら、ふー♡　ふー♡』

『早く触りたいんだね。ダメだよ♡　もっとふーふーしてあげる♡』

「は……っ、あッ♡」

オナニーなのに、自分で好きに触れるのに。支配されている感覚に、甘イキが止まらない。

（ああ、しあわせだ）

目を閉じてさえいれば、ここにはいつも悠真がいる。私だけを見て、私だ

けに意地悪をして、私を気持ちよくすることしか考えていない悠真が。

こんなに満たされているのに。どうしてこんなに悲しいのだろう。

ふいに瞼の裏の彼がブレた。代わりに浮かんだのは、ガラス越しの光だった。

あの日、私は仕事帰りにたまたまその通りを歩いていた。

宝石店のショーウィンドウの前に悠真がいた。隣には知らない綺麗な女性。少し年上に見えたその人は、姿勢がよくて、笑い方が上品で、悠真が何か言うたびに、おかしそうに肩を揺らしていた。そして二人はそのまま、楽しそうに店内に吸い込まれていった。

（そうか。私が知らなかっただけで、悠真には、指輪と一緒に選びたくなるような相手がいるのか）

一度きりなら見間違いだと思えたかもしれない。偶然だと。

でも別の日、今度は二人がカフェにいるのを見てしまった。女性の目の前には、たくさんのフルーツが乗った大きなパフェ。それを幸せそうに食べている姿を、悠真がコーヒーを片手に眺めていた。呆れたような、それでいてやわらかい瞳で。

正直に言えば、お似合いだと思ってしまった。

私が悠真の隣を歩いているよりも、ずっとずっと絵になる二人だった。

好きな人の幸せを手放しで喜んであげられるほど、私はできた人間じゃない。

悠真がこの先、私以外の女性と結婚して、家庭を築いて、子どもができて結婚式に呼ばれたり、新居に招待されたり、赤ちゃんに会いに来てと言われる——そこに、笑顔で行ける気がしなかった。笑って祝福なんてできない。無理だ。みつともなく声を上げて、わんわん泣いてしまうだろう。

だから私は、逃げたのだ。

「……………んっ、う……………♡」

指は、勝手に動き続けている。胸が苦しいのに、身体はちゃんと気持ちいい。心だけが置いていかれているみたいで、それがひどく惨めだった。

悠真と離れてから、新しい恋をしようと思わなかったかといえは嘘になる。職場の先輩が紹介してくれると言ってくれたこともあった。でも、全部断った。

（悠真以上に誰かを好きになることなんて、きっとこの先、ないんだろうな）

投げ出した左手の先が、ラグの上のプレイヤーに触れた。マスキングテープが貼られたざらついた縁を撫でる。

（私には、新しいものを買うことなんて、できないよ……）

『へえ、考えごとなんて、随分余裕じゃねえか』

『いのり、考えごとするなんて、随分余裕だね？』

(……タイミング、よすぎ)

録音された音声のはずなのに、まるで私の心を見透かされているみたいでどきりとした。

『おら、手が止まってんぞ。悪い子にはお仕置き、クリちゃんむきむきして、爪でカリカリしろ。わかってるよな。まだイクなよ』

『手、止まってるよ。悪い子のいのりにはお仕置きかなあ？ クリむいて、爪でカリカリしてごらん。わかってるよね。いったらダメだよ』

「あ、あ♡ んう……ッ♡」

声に合わせて、クリを剥いて、人差し指でカリカリ♡する。

(気持ちいい……♡ 剥かれてよわよわなクリちゃんカリカリしてるとこ、悠真に見られて……ッ♡)

息が浅くなる。さっきまでの悲しさが、快楽に押し流されて消えていく。

結局、私はこうやって、何もかもをごまかして生きていくのだ。

『雑魚メスクリちゃんもうパツパツじゃん。でもまだイったらダメだからな。』

ほら、垂れてる本気汁、勃起したクリにぬりぬりして、シコシコ続けような♡

『いのりのよわよわクリちゃん、パツパツだね♡ まだイっただめだよ。ほら、本気汁、クリに塗ってシコシコ続けて♡』

「我慢♡ がま、んっ……♡」

イク直前で快楽が弾ける手前のクリを爪でカリカリと引っ搔いたり、くると甘く撫でたりする。気を抜くといってしまいそうで。でも両耳から聞こえてくる声はそれを許さない。そればかりか、残酷に続ける。

『オイ、手加減すんな。ちゃんと全力でシコシコしろ。はい、俺の声に合わせて……しこーしこっ♡ しこーしこっ♡』

『もっと本気でシコシコしようね、いのりならできるよね。ほら、僕の声に合わせて……しこーしこっ♡ しこーしこっ♡』

「やばあ……♡ ゆうま、ゆうま♡ イッ、ちやい、そッ……♡♡♡」

ツラくて、もう我慢できなくて、無意識に悠真の名前を呼んでしまう。

『ほら、いいぞ、イけ♡』

『いのり、いいよ。イって♡』

「んんっ♡ い、くううッ……♡♡♡ いく……、イ……」

両足の爪先が、きゆうっと丸まる。

あと少し。あと、ほんの少しで――

ピンポーン。

「……ひっ」

びっくりして、危うく大きな声が出そうになった。

最悪のタイミングで、間延びしたインターホンが鳴った。

全身に溜まっていた熱が、行き場をなくして宙に浮く。

オナニーを中断して身体を起こす。

宅配は頼んでいない。だとすれば誰だろう。

（居留守。絶対に居留守！）

ピンポーン。ピンポーン。ピンポーン。

無視を決め込んだのに、立て続けに鳴らされる。古いこのアパートのイン
ターホンは、無駄によく響く。

（ちよつと！ 鳴らしすぎなんだけど……！）

近所迷惑への不安と、オナニーを邪魔された苛立ちと。いつもだったら絶
対に無視するのに、何を思ったのか私は来訪者に一言物申すことに決めた。
（人の一番いいところを邪魔する不届き者を、成敗してやる）

どうせ廊下は暗いし、すぐに話は終わるだろうから、下着を着ていなくて
もなんとかなるだろう。

薄手で、部屋着として万能なピンクのワンピースだけ引っかけて、覗き穴
もないドアのノブを握る。ひやりとした金属の感触。チェーンは最初から壊
れていたから、使っていない。鍵を開けるなり、確認もせずドアを開いた。

かちやり、と軽い音がした。

「どちら様——」

言い切る前に、聞き慣れた声がそれを遮った。
ぬっと大きなシルエットが現れる。

「いのり。誰か確かめないで開けるの、感心しないなあ」

「……へ？」

聞き間違えるわけがない。ここに、いるはずのない声。

今の今までえっちな妄想をしていた相手。

「来ちゃった♡」

「な、なんで……」

——時間が、止まった。

薄暗い廊下に、見慣れた輪郭だけが立っていた。

すらりと高い背丈。私を見下ろす角度。かたちの崩れていないスーツの肩。
ネクタイのあたりが少しだけ緩んでいるのが、影の中でもわかる。

顔はよく見えない。見えないのに、誰なのか考えるまでもなかった。

彼の纏う香りが暗がりから漂ってきて、その答えを教えてくれる。少し汗ばんだ、それでも清潔な匂い。ずっと忘れられなくて、いつも想像していた大好きなもの。それが今は、私の膝を小さく震わせた。

背中を冷たい汗が一筋、つうつと伝う。心臓が耳の奥でうるさく鳴っている。

「喜んで、いのり。またお隣さんだよ」

「……は？」

「ちょっと前にね、隣に越してきたんだ。やっと部屋も片付いたし、新しい職場にも慣れてきたから挨拶をと思って」

悠真の視線が、ゆっくりと私の全身を滑り落ちていく。肌を目でなぞられている。そんな感覚。裸でもないのに、裸よりずっと心許ない。

嫌な予感として、急いでドアノブを握ったままだった腕を内側に引いた。

「何してんの？」

そんな私の行動などお見通しで、ガンッと即座に革靴を履いた足を差し込

まれてしまう。

じわじわと事の重大さに気づく。

この場所は、誰にも告げていない。連絡手段も絶った。

だから、突き止められるなんて思ってもみなかった。

どうやってこの場所を知ったのか、なんでわざわざ隣に引越してきたのか。聞きたいことが次から次に頭を駆け巡って、考えがまとまらない。聞いたさうと口を開きかける私より先に、悠真の口がまた動いた。

「——ねえ、いのり。どうして下着つけてないの？」

空気がぴりつと冷える。

自分が今、とんでもない格好をしていることを思い出す。拭かずに出てきてしまったせいで、太ももとろりと熱いものが伝うのがわかった。

その感覚に反射的に脚を閉じた。

パタン。カチャツ。

いつの間にか三和土に踏み込んでいた悠真が、後ろ手でドアを閉め鍵をかけていた。小さな金属音がやけに大きく響く。逃げ道が消えた音だと思った。リビングから漏れる灯りが、ようやく彼の顔を照らした。

朝はきちんとセットされていたのだろう茶髪が、額にいくつか落ちている。すっと通った鼻筋。形のいい唇。昔から羨ましかった長い睫毛。その下の瞳が――今、まっすぐに私を捉えている。

深くて青い色は、いつもは夜空みたいにキラキラしているのに、今日ほどこか濁っていてちっとも綺麗じゃない。

「色々聞きたいことがあるんだけど……その前に、お仕置き、しないかね」
見たことのない顔でそう囁かれて。

そのくせ声だけは、私がよく聞いていたあの音声とそっくりで。
私の奥から、こぷりと返事みたいに蜜が溢れた。

何も言えずに立ちすくんでいると、手首を掴まれた。

悠真が革靴を脱ぐ。いつもの彼だと絶対にしないだろう乱暴な脱ぎ方。

その間も私の手首を掴む手だけは、一切緩まなかった。

ころんころんと落ちた靴には見向きもせず歩き出す。

掴まれた手は振りほどく間もなく、ずんずんと部屋の奥へ引きずられていく。

廊下の冷たい床を裸足で滑るように歩かされて、狭い部屋では抵抗する間もなく、ぽすん、と安物のベッドに放り出された。

ぎしり。

ベッドが悲鳴をあげる。一人で寝ても軋むそれに、悠真も片膝を乗せる。

一八〇センチ超えの男が加わったら、耐えられるはずもない。

放り出された拍子に、ワンピースの裾がふわりと大きくめくれた。何も履

いていない下半身が、一瞬、彼の視界に晒される。

ぎし。

乗せたばかりの膝が、ゆっくりと下ろされた。

マットレスがふわりと持ち上がって、私だけがベッドの上に取り残される。

(……え?)

そのまま乗り上げてくるのかと思ったら、悠真は私から離れていった。

悠真の周りの温度が、氷点下まで下がった気がした。

すうううっ……。

床に立った悠真が、大きく息を吸う。左手で髪をかき上げて、天を仰ぐ。

深い深いため息のあとの声は、ぞっとするほど静かだった。

「はあ……いのり。ブラだけじゃなくて、パンツも履いてないなんて……。

いつもこんな格好で玄関に出てるわけじゃ、ないよね?」

ジャケットを脱いで、無造作に床へ落とす。

「訪ねてきた人に色目を使って、誘惑してたの?」

緩めていたネクタイに指をかけ、しゆる、と音を立てて引き抜き、同じように床へ放る。

「このベッドに連れ込んで、キモチイイこと、してたの？」

その所作の一つひとつが、ゆっくりで優雅で——そして、どこか捕食者めいていた。

逃げるなら今なのだ、頭のどこかがわかっている。それなのに身体は、彼が一枚ずつ服を脱いでいくのを、ただ見ていることしかできない。

「ち、ちが……ッ、そんなこと……したこと、ない……。今日は、たまたま……」

「たまたま……？ たまたま、ほとんど裸みたいな格好をして外に出るの？」

声がそこで急に小さくなった。

「……困る。困るよ。そんなことしないで。俺のいのりなのに。こんな姿、誰にも見せたくないのに」

「……悠真？　なんて言ったの？」

「なんでもない」

とびきりの笑顔で言われた。

（これは……。今まで見たことないほど怒ってる）

悠真がこんなに怒るなんて、大事に残してあった彼のプリンを、私が黙って食べてしまったとき以来だ。

悠真の指が、シャツのボタンを上からふたつ外す。露わになった鎖骨だけが、リビングから届くわずかな灯りを拾って浮かんでいる。

「でも……据え膳食わぬは、なんとやら……だよね」

いつもの王子様みたいな笑みのまま、瞳はもうずっと笑っていない。星の見えない暗い夜を溶かして流し込んだような、見たこともない光り方をしてる。その目から、逸らせない、逃げられない。逸らした瞬間、食べられてしまう気がした。

ぎし、と、ベッドが再び軋む。悠真が、今度はゆっくりと両膝を乗せてき

たのだ。

つう、と剥き出しの太ももを、指が這い上がってくる。ひやりとした指先の感触を、皮膚が勝手に追いかける。こんな風に悠真に触れたことなんて、これまで一度もなかった。

「ちょ……悠真……っ」

悠真の指が、鼠径部の際どいところで、焦らすように往復する。さっきまでの熱がぶり返す。悠真は意地悪で、触れてほしい場所には、絶対に触れてこない。これはわざと、外されている。

「もう、絶対にこういうことしないで。約束して、いのり」

「あ、ゆう……まっ」

「聞いてる？ 約束して」

低い声が耳孔にねっとり絡みつく。抵抗しなきゃと思うのに、身体は勝手に彼の指を追って腰が揺れてしまう。

「んっ……約束、する。もう、しない……っ」

「うん。いいこ」

悠真の声から、トゲトゲしたトーンがすとんと抜け落ちた。ご褒美みたいに、指が少しだけ際どい場所に近づいた。それだけで、下腹の奥が、ずくんと重く疼く。

「じゃあ、次の質問」

悠真が、コンッとベッドの隣の壁を叩いた。

「この壁ね、とつても薄いんだよ。知ってた？」

(……えっ)

何を言われているのか意味がわからなかった。けれど少し遅れて理解した瞬間、頭から足の先まで血が引いた。

壁が薄い。隣に悠真が住んでいる。つまり――

「毎晩、あんなに可愛い声で、あんあん喘いで。いのりは一体……何をしてたの？」

「……っ!!」

「僕がどんな気持ちで、壁越しにその声を聞いてたかわかる？ まさか、男でも連れ込んでるのかって。気が気じゃなかったんだけど」

（聞かれてた！？ 全部？ 毎晩の私のアレを？ ……今すぐ消えてなくなりたい）

「顔、真っ赤。……それに、ここ」

指が、割れ目をつうつと撫で上げた。

「聞かれてたって知って、また溢れてきた。いのりは恥ずかしいと感じちゃう子なんだね？ 僕知らなかったなあ」

そう続けながら、クリトリスと割れ目を何度も往復するように撫でられる。欲しかった刺激がいきなり与えられて、羞恥と快感がぐちゃぐちゃに混ざって、私の喉から悲鳴みたいな声が漏れた。

「あぁ……！」

「答えて、いのり。毎晩何してたの？ こんなにえっちな身体で、僕の知らないところで、誰かに可愛がられてたの？」

声はどこまでも優しいのに、ひっきりなしに動く指からの刺激は優しくな
い。太腿の内側が、意思と関係なく引き攣った。

「ひっ、んっ♡ んっ、あ……♡」

「気持ちよくなってる場合じゃないよ、いのり。ちゃんと僕の質問に答えて。
ねえ、ねえ、ねえ！」

入口の浅いところを、悠真の太い指の腹でくちゅくちゅと小刻みに舐られ
る。ナカには入ってこない。その入ってこないもどかしさが、お腹の奥にと
んどん溜まっていく。

ぴちゃ……♡ ぬちゅ♡ ぷちゅ♡

自分の身体が立てるいやらしい水音が、静かな部屋に響き渡る。その音が
ら逃げたくて、耳を塞ぎたくなる。

「オ……ナニー、してました……っ」

「なんて？ よく聞こえなかった」

「オナニー！ 毎日、オナニーしてました……！ 彼氏なんか、いないっ……」

……！」

「そう。……それで？」

(……それでっ？)

とろけた頭では、その先がうまく組み立てられない。

「毎日オナニーしちゃうような、えっちないのりは」

悠真が、耳元で囁く。吐息が、耳たぶをくすぐる。

「僕に、入り口をちゅぷちゅぷってされて、それだけで……満足できるの？」

つぶ♡　つぶ♡　ぷちゅっ♡　つぶっ♡

わざとほんの少しだけ指を沈められて、浅い所をつぶ♡　つぶ♡　される。自分の指を入れたときは、ちっとも気持ちよくなかったのに。悠真の指だと少しの刺激でも電流が走り、一瞬、息が止まった。

「いのり。気持ちいいの？」

「っ……ふぁっ？」

「答えて」

「きもち、いい……っ」

「教えてくれてありがと、いいこだね♡」

悠真が、満足そうに喉を鳴らして笑う。「逃げろ」という警報が、頭のと

こか遠くで鳴り響く。

「僕ならオナニーじゃ味わえないこと、全部教えてあげられるけど。痛いことは絶対にしたくない。約束する。——うんといのりを気持ちよくしてあげる。

どうする？」

クリでしかイったことがないのに。今、そこには触れられてもいないのに。私の身体は絶頂の準備を始めている。

「あ……♡ あ♡ んッ……♡♡♡」

「僕に、もつといのりを気持ちよくさせて？——いいよね？」

「……あい♡ 気持ちよく、してくだしゃい……ご主人様♡」

えっちなことで頭がいっぱいになっていた私は、妄想の中の悠真に言わさ

れているセリフを無意識のうちに呟いていた。

（やばい。とんでもないことを口走った気が……）

我に返って慌てて口を塞ぐが、全てが遅かった。

「は？ ……ご主人様？」

悠真の指が、ぴたりと止まる。

「なにそれ。誰にそんなこと言うように調教されたの」

「……へ？」

甘かった声のトーンが、低く、暗く、地を這うようなものに変わった。その声に恐怖を感じつつも、正直に白状することはできなかった。

言えない。言えるわけがない。えっちな音声を聞いて、しかも悠真にされていることを想像して、脳内にイマジナリー悠真まで作り出して、毎日のようにオナニーしていたなんて。絶対、言えない！

私が黙り込んだのをどう解釈したのか、悠真の瞳がまたどろりと濁った。「へえ……。いのり。君はどれだけ僕をイライラさせたら気が済むのかな」

悠真の指が、再び動かされる。

今度は、さっきまで私が可愛がっていたクリトリスを、比べ物にならないくらいにスピードで容赦なくシコシコ♡とシゴかれる。

私は弁解する余裕もないまま、言葉にならない喘ぎ声を漏らすことしかできない。

「あ……ゆ、ま……♡ ひ、う♡ とま、っ……あ、あ♡ やあ、止ま……
でえ♡」

なんとか止まってもらうように訴えたものの、ピシャリと却下される。

「やだ」

ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちよ♡ くちゅくちゅ♡

「はっ♡ ひ、う……っ♡ や、やあ……♡♡♡」

「誰。どんな男」

「ゆ、ま……、な、や♡ やだあ……」

「いのりにそんなこと言わせるように躡けたの、どこのどいつ？」

「ひっ……、ゆ、ゆうま……激し、はげしいっ……」

「ねえ、いのり。教えて？」

「……こわっ、ゆうま、………こわい」

（知らない。こんな悠真、知らない……）

さっと血の気が引いていく。

私のクリトリスを乱暴に、けれど傷つけないように擦りながら、冷ややかな言葉を放つ悠真。その姿がまるで知らない人のように、快樂よりも恐怖が勝って目尻に雫が溜まっていく。

今日の悠真はずっと変だ。強引なことはあっても、こんな風に私が嫌がることを、今まで一度だってしたことはないのに。

久しぶりに会ったからか、私が知らない悠真ばかりが目につく。変わってしまったことを見せつけられているようで、なんだか胸が苦しい。

「……ごめん」

ふいに指の動きが緩んだ。

「ごめん、いのり。君にイライラして、乱暴するのは違うね。……こんなことなら、もっと早く捕まえて、さっさと誰にも触れられないように閉じ込めちゃえばよかった」

ぱつと秘部から手を離れた悠真は、私の身体をそつと引き起こして、ベッドに座らせた。

今にも零れ落ちそうになっていた涙を親指の腹で優しく拭われる。じつと私を見つめる深い青は、怒りよりも後悔の色が強い。同時に、傷ついているような、泣くのをこらえる子どもみたいだった。

何か言おうとして開いた唇が、音を紡がないままきゅつと引き結ばれる。その表情にいたたまれなくなつて。

気づいたら私は、彼を抱きしめていた。

「いのり？」

「悠真。違うよ？」

「違うって、……何が、」

声が、うまく出ていない。

「いのりが、毎日オナニーしちゃうくらい、えっちなことが好きだって知ってたら……僕が毎日抱き潰したのに」

腕の中の身体が、小さく震えている。

ぽつり、ぽつりと、言葉が続く。

「誰かに取られるくらいなら、ちゃんと告白すればよかった。わざわざ言わなくても、いのりは僕のものだと思ってた。でも違った……。こんなことになるくらいなら、さっさと襲って、身体から墮として、僕なしじゃ生きていけなくすればよかった……。ずっと、そんなことばかり考えてた。この一年、毎日」

しゅん、と肩を落として。どんどん小さくなっていく声のせいで、後半はあまりよく聞こえなかった。

言うや否や、とうとう悠真が泣き出した。

ぽろぽろと、声すら上げずに泣く姿はただただ幼子のよう。

さつきまであんなに強引に、人のことを追い詰めていたくせに。ギャップでどうにかなりそうだと。

私の胸に顔を埋めて、ぎゅうつと縋りついてくる。広い背中が小刻みに揺れている。悠真のこんなに弱っている姿、私は知らない。

いつも余裕たっぷりで、なんでも器用にこなしてしまう完璧な幼馴染が、泣いている。

後ろめたさもあったけど、私にとっては天国みたいな一年だった。けれど悠真にとっては、つらい一年だったのかもしれない。

「……き」

「え？　悠真、なんて言ったの。聞こえない……」

ぐりぐりと顔を押し付けながら、悠真が何かを言った。くぐもった声は、私の大して大きくもない胸に吸い込まれて、意味を結ばない。と、次の瞬間。

ばつ、と、勢いよく顔を上げた悠真の長い睫毛に溜まっていた涙が、弾けて散った。リビングの灯りを映して、それが一瞬、きらきらと輝く。

泣き顔すら、絵になる男だ。

「いのりが、好き」

まっすぐに、彼が言った。

「もう、誰にも取られたくない」

グズグズと鼻を鳴らし、縋るように私を見つめながらそんなことを言われる。

（……あれ？）

色んなことがいっぺんに起こって混乱している頭でも、ひとつ引っかかりを捉える。誰にも取られたくない？誰にもって、誰に？私が、誰かのものになったことなんて、一度もないのに。

「悠真。私、彼氏いたことないよ？」

「……え？」

濡れた瞳が大きく見開かれる。頬を伝っていた雫が、その一筋を最後にぴたりと止まった。

「私がドスケベな言葉をいっぱい知ってるのは、その……そういう音声を……よく聞いてるからで。さっきの言葉も、その影響で、ぽろっと出ちゃっただけというか……」

自分の性癖を自己申告しているようで、これはこれで、死ぬほど恥ずかしい。何に使っているのかは、どうか察してほしい。

「そっかあ……よかった」

悠真が、深く長い息を吐いた。全身から力が抜けていくのがわかる。一年分の何かが悠真の中からゆっくり抜け落ちていくのを感じた。

（ねえ、悠真。あの人は……）

喉まで出かかった言葉を、私は飲み込んだ。

瞼の裏には、宝石店のガラスに映った悠真と知らない女性の姿がまだ焼きついている。パフェを食べる横顔を眺めていた、あのやわらかい表情。

私が実家を出て一年。

悠真はずっと、私を探していたという。責任感の強い人だから、『面倒を見る』と言い続けてきた相手が、ある日突然何も言わずに消えたら。

(そっか。そういうことか)

すたん、と腑に落ちてしまった。

悠真はきつと混乱している。消えた私を見つけて安心して、そこに一年分の感情が押し寄せて。それを『好き』だと思い込んでいただけだ。

だって、じゃないと説明がつかない。

落ち着いたらきつと思ひ出すはず。自分にはもっとふさわしい人がいることを。あの、姿勢の綺麗な、笑い方の上品な人のことを。

だったら私が今ここで「あの人は誰？」と聞くのは、あまりにも……。それに、現実を突き付けられるのが、怖い。

でも、今日だけは。

今この瞬間だけは、悠真は私を見ている。一年分の熱を、まっすぐ私にだけ向けている。

（一回だけ。一回だけ、もらってもいいですか。そしたら、ちゃんと返すから）

誰に許しを乞うているのかもわからないまま。私は、覚悟を決めた。

「……私も、悠真が好きだよ」

悠真の瞳がぶわりと潤む。せつかく止まっていた涙が、また溢れ出す。

「私には、悠真以外に頼れる人はいないんだから。ちゃんと最後まで責任持つて面倒見てよね」

わざとそういう言い方をした。断られると身構えていた彼へのちょっとした仕返し——ということにしておく。

本当はそう言わないと涙が出そうだったからだ。

悠真はぼろぼろ泣きながら、私の名前を壊れたように繰り返す。

「いのり、いのり……のい、好き。好き……」

「もう、泣きすぎじゃない？ キャラ崩壊してるよ」

茶化しても、まるで効かない。機械みたいに私の名前を呼ぶ。最後には、とうとう昔の呼び方に戻ってしまった。

——のい。

まだ上手に言葉を言えなかった頃の呼び方。

今は悠真だけが、ときどきそう呼んでくれる。その甘い呼び名が、涙と一緒に悠真の口から零れ落ちる。

可愛くて、愛おしくて、どうしようもなくて。

（とはいえ、今日でおしまいだけど）

頭の片隅の冷静な部分が、私を現実に戻す。幸せと悲しみが交互に押し寄せて、心をぐちゃぐちゃに引っ掻き回す。

それでも、構わなかった。

両手で悠真の髪をわしゃわしゃとかき混ぜる。昔と変わらず、ふわふわだった。

「てことで。私の初めて、もらってくれない？」

「……ちよつと。感動的な雰囲気ぶち壊すのやめてよ」

涙で濡れた顔のまま、悠真が呆れたように眉を下げる。私のせいで、髪はぐしゃぐしゃだ。

それがすっかりいつもの悠真で安心した。弱っている彼は、色々と心臓に悪い。

「いや、散々お預け食らってたのこっちなんですけど。それに、こういうときってそのまま流れでセックス、でしょ？」

ぴらり。

わざとワンピースの裾を持ち上げた。剥き出しの脚と、何も履いていないその奥を見せびらかすような格好。

「う……なにそれ、やばっ」

「こういうの好き？」

「……いのりがすることなら、なんでも好き」

ガバツと抱きつかれて、そのまま二人して倒れ込んだ。

悠真の重みが私の全身にのしかかる。汗ばんだ肌越しに、彼の体温が伝わってくる。

「悠真もちゃんと男なんだね。かなり物好きだけど」

「当たり前。うーん、物好きだと思ったことはないかなあ」

顔のすぐ横に、悠真の腕がつく。囲われた腕の中に、私はすっばりと収まってしまう。

「いのり」

名前を呼ぶ声が、とろとろに甘く掠れている。

本当に恋人になったみたいだ。

（ずっとこの時間が続けばいいのに……）